

〈公開授業報告〉

鎌田敏夫『会いたい』を読む

白瀬浩司

(初出誌 || 『解釈』 第42卷第5号、一九九六年五月)

〈公開授業報告〉

鎌田敏夫『会いたい』を読む

白瀬浩司

一

一九九六年二月二十五日。愛知私教連（愛知県私立学校教職員組合連合）主催の「第三回授業改革フェスティバル」（於・愛知県豊川市私立豊川高等学校）で、〈授業バトル・授業の鉄人〉と銘打った公開授業の一つを担当する機会を得た。

鎌田敏夫の短篇小説『会いたい』^①は、一九九四年度に勤務校の高一の生徒たちと共に授業で取り組んだ教材である。^②その折に八時限ほどかけた読解の作業を、今回は初対面である愛知の高校生たちを相手に（参加者は複数の学校・複数の学年にわたり、生徒同士も初対面のメンバーと同席する教室で）一時限でやっつけてしまおうという試みであった。なお、このことについては、公開授業の始業時にも触れた。当然ながら、授業の形態も、前者と後者とでは、まったく異なるものとならざるを得ない。さらに付言しておくならば、前者は生徒たちの（自分の好きな歌を

モチーフとして)「現代の歌物語を書く」という作業^⑧によって完結する取り組みであった。

私に与えられたのは、第二校時(午前十一時始業)の六十分間である。ただし、第一校時(午前十時始業)がずれ込んだこと等もあり、私の始業は十五分遅れとなった。司会者による私の紹介、音楽テープを聴くのに五分間、小説本文の通読(生徒各自の黙読による)に要する二十分間——これらを除くと、読解作業に割くことのできる時間は三十分程度しかない。多少の時間超過は構わない由ではあったものの、私がこの公開授業を終えたのが十二時三十五分であるから、読解の作業に五十分を費やしたわけで、結局、今回は一時限八十分間の取り組みということになった。

一一

公開授業では、導入の段階で、まず、生徒たちに沢田知可子の歌う『会いたい』という曲、

① ビルが見える教室で／二人は机、並べて／同じ月日を過ごした／すこしの英語と、／バスケット、そして／私はあなたと恋を覚えた

② 卒業しても私を／子供扱いしたよね／『遠くへ行くなよ』と／半分笑って、半分 真顔で／抱き寄せた

③ 低い雲を広げた冬の夜／あなた 夢のように／死んでしまったの

④ 今年も海へ行くなって／いっぱい 映画も観るって／約束したじゃない／あなた 約束したじゃない／会いたい…

⑤ 波打ち際すすんでは／不意にあきらめて戻る／海辺をただ独り／怒りたいのか、泣きたいのか／わからずに歩いてる

⑥ 声をかける人をつい見つめる／彼があなただったなら／あなただったなら

⑥ 強がる肩をつかんで／バカだなんて叱って／優しくKissをして／嘘だよって抱きしめていて／会いたい：

⑦ 遠くへ行くなと言って／お願い一人にしないで／強く、抱き締めて／私のそばで生きていて

⑧ 今年も海へ行くって／いっぱい 映画も観るって／約束したじゃない／あなた 約束したじゃない／会いたい：

(作詞〓沢ちひろ、作曲〓財津和夫、編曲〓芳野藤丸)

を聴いてもらい、ここには「学生時代につき合っていた恋人と死別した女性の、死んでしまった彼に寄せる切々たる想い」が綴られていることを確認した。さらに、鎌田敏夫の短篇小説『会いたい』の時間が、周知の古典『伊勢物語』などと同様、作中に織り込まれた歌をめぐる物語として流れていること、すなわち、この『会いたい』という曲が小説『会いたい』の主題と密接に絡み合うものであることに触れる。

その上で、私は彼らに次のような注文をつけ、小説本文の通読(黙読による)に入るよう指示した。——小説『会いたい』には、浩一という主人公をめぐる(現在の恋人である真弓、大学時代の恋人だった恭子、高校時代の恋人だった美知子との)三つの恋が描かれている。同じ時を共有しえないこれら三つの恋が作中でどのように結び合わされていくのか、という点に留意しつつ読み進めてほしい——と。

小説本文は文庫本三十頁^{ページ}におよぶ分量である。生徒たちの黙読の遅速の差を考え、二十分間をいちおうの目安として設定した。その間、沢田知可子の『会いたい』がBGMとして流れている(テープレコーダー使用、四回流すとおよそ二十分)。読み終えた生徒たちには、順次、短冊型の用紙に初発感想を記入して私の方に提出してもらい(初発感想用紙は、生徒の読了確認・指名のための氏名確認・以後の授業展開の決定、という三つの用に供することになる)、早めに読了した彼らが時間を持て余し過ぎないように、初発感想がある程度出揃った時点で、次の二つの発問を板書しておいた。

(1) 真弓の言葉を信じるならば、結局のところ、二度目以降の『会いたい』の電話は誰のしわざだったのだろうか。

(2) 真弓が踊り場で会った制服姿の少女は誰か。仮にその少女が美知子だとすると、彼女はなぜ浩一ではなく、真弓に会いに現れたのだろうか。

以後の授業展開として、少なくとも二様のパターンを想定しうるだろう。それは、作品世界の現在時制における不在者（死者）である美知子の存在を生徒たちが認めるか否か、という一点にかかっている。すなわち、右の発問(1)に絡めて言うならば、彼らの読みが「二度目以降は美知子のしわざ」、あるいは「二度目以降も真弓のしわざ」のいずれに傾くかということだ。後者の場合であれば、真弓の恋の手管てくだとそれに翻弄ひたひたされていく浩一の姿を捉え、人の心の底知れぬ深淵（あるいは闇）の怖さを読み解いていくことになる。ただし、今回は、以下に掲出する生徒たちの初発感想からも窺えるように、前者の読みに立った授業展開のパターンを選ぶのが適当であると判断した。

◎嘉規・I（高二） この話は、留守番電話に入っていた曲をめぐることで、さまざまな思いが複雑に絡んでいたのだから分りにくかった。

◎剛臣・H（高二） 変わっている話だった。一度解決を見せたか、と思った話が再び最後で一転した。その後どうしたのだろうか、と思うような話だ。

◎薫・S（高一） 好きな人に一秒でも多く会っていたいというのは誰でも同じだと思う。不安やいき違いも多いけど、離れた人ならなおさら切ない思いをしていると思う。

◎香代・S（高二） 自分の気持ちを伝えようと一生懸命な女性の心情が『会いたい』という曲でとても強く感じられ、女性として感動しました。

◎智江・M（高一） 浩一が自分のことを忘れてしまったことが美知子は悲しかったんじゃないかな。高校時代のことを思い出す辺から少し感動的。

◎健太郎・S（高二） 現実にはありえないけど、なんか現実味がある。真弓の暖かい心にはほのぼのする部分と、美

知子が現れる、ぞっとする部分が面白い。何か心に残しながらもさわやかな印象をもった。

◎誠・K（高一） 死んでしまった恋人の思いが、今そのときの心の中の穴を思い出してしまったためのなぐさめではないだろうか。

◎直路・K（高二） 死んだはずの人が、ある日突然恋人の所にやってくるなんて信じ難い話だが、死んだ人の会いたいという気持ちが伝わってくる。

◎敬佳・F（高二） 思いの強さみたいなものが伝わって来た。その思いは生きていても死んでいても変わらないものなんだと思った。

◎真由美・I（高一） 死んだはずの女性が会いたいという思いで現れたのには少し怖い気がしたが、そんなけなげな恋も何だかいいなって思いました。

◎宏美・N（高二） 電話がゆっくり切れたり、白いワンピースとか、部屋の空気とかが曲の雰囲気と合っていて、すごくこわい。

◎喬道・S（高一） すごく悲しいと、とても恐い、というのが心に残った。必然とも偶然ともいえないような、どうしたらいいのかわからなくなる、そんな気がした。

◎重夫・K（高一） 古の日本みたいに歌に気持ちをこめて贈るのは想像の世界に入って楽しいと思う。美知子の霊だとしたら、なぜ今ごろと思った。

◎美樹・O（高一） とても興味のわく内容の話だった。死んだはずの美知子に真弓が会ったと言う所で、とてもびっくりした。きっと何かあるのだろうと思った。

◎和良・I（高二） 美知子は浩一に会いたいと同時に真弓とうまく心が通じていない浩一の事を心配して、二人の思いをつなげようと曲をかけたと思う。

◎睦美・O（高一）　こわかった。だけど、会いたいという歌で、美知子が、この仲をとりもったような気がする。

◎絢香・I（高二）　美知子は浩一のことをすごい愛していたと思う。真弓も浩一に会いに帰ってくるなんて浩一はとても幸せ者のように思える。イイナ。

◎三四郎・T（高一）　自分の気持ちを真実として受け入れた時、その事が心から離れなくなる。そして、その心を如実にあらわしたのだと思う。

◎秀幸・S（高二）　死んだ人が会いに来た。しかも浩一ではなく真弓に。きっと美知子の心はこの歌とともに生きていて、この心を伝えたかったのだろう。真弓がボストンから突然会いに来たように。

◎友宣・S（高一）　二度目以降は死んだと思っていた美知子が生きていて、もう一度会って話をしたと思って電話に『会いたい』を入れた。

◎庸子・O（高二）　空想的で不思議な話だと思った。このような曲も、よく聴くと一つの話になっているんだなあと思った。現実ではありえない所が気に入った。

発問(1)に関しては、二度目以降の電話の主を美知子だとするのがほぼ全員の共通理解である（だとすれば、当然、発問(2)の少女が美知子であるというのも共通の前提となる）ことを言明して、発問(2)に関する意見を数名の生徒たちに求めた。いくつかの初発感想でも既に言及されているごとく、浩一の現在の恋人がどんな女性なのか（あるいは真弓の気持ち）を確かめるため、浩一のことを彼女に託すため、といった答えが即座に返ってくる。そこで、恭子との交際時代にはおそらく現れなかったであろう美知子が、なぜ真弓の前には姿を見せたのだろうか、と問いかけた上で、三つの恋を浩一の側から端的に捉えた表現を板書——真弓Ⅱ「不信感」／恭子Ⅱ「強烈な思い出」／美知子Ⅱ「淡い初恋の思い出」——し、さらに「歌の文句は、そのまま美知子と浩一の高校時代のことだった。」という叙述を指標として、沢田知可子『会いたい』と小説本文の対照作業に入っていた。

歌詞④ バスケットコートできびきびと走りまわっている姿が印象的だった。……学内の英語弁論大会で、シャープな英語をしゃべり抜いた。

歌詞⑤ 「遠くへ行くなよ」／浩一も、美知子に言ったことがある。

歌詞⑥ 美知子は、……交通事故に遭ってしまったのだ。

歌詞⑦ 「また、海へ来ようね」／と、その時に約束をしたのだ。／「試験が終わったら、いっぱい映画も観よう」

歌詞⑧ 怒りたいのか泣きたいのか分からずに歩いたのは、歌の文句のままだった。

歌詞⑨ 該当箇所なし。(※「美知子！」／自分でも気がつかずに、浩一はそんな言葉を発していた。／「美知子なのか！」電話は、ゆっくりと切れた。)

歌詞⑩ 砂浜で、浩一は、美知子と初めてのキスをした。

歌詞⑪ 「柏木くんこそ、遠くに行かないで。私のそばで、ずっと生きていてほしい」

歌詞⑫ 歌詞⑩に同じ。

『会いたい』が美知子から浩一へのメッセージであるとすれば、歌詞⑬「あなた、夢のように／死んでしまったの」(さらには歌詞⑭)に該当するのが、美知子の側の現実ではなく浩一の直面したそれであることは不自然ではないか。——そんな疑問を喚起して、先の板書にたち返る。

真弓は現在ボストンの大学に留学中である。「恋仲になったばかりの時に遠くに行ってしまうというのは、自分のことを愛してないのではないか」との思いを浩一は彼女に対して抱いていた。そんな浩一の「不信感」は、(彼自身、気付いていないのかも知れないが)かつて二度目の妊娠中絶を契機に恭子の前から自分が逃げ出してしまったことへの罪悪感の裏返しであり、さらに遡れば、つき合いはじめて間もなく美知子を交通事故で失ってしまったという彼の心の傷に根ざすものであった。また、「争いもし、仲違いもし、激しく愛し合ったりもした」真弓と

の「強烈な思い出」は、美知子との「淡い初恋の思い出」をいつか記憶の彼方へと押しやってしまっていた。

美知子との恋について問うと、何の疑いもなく相手に向き合うことのできた浩一の姿を生徒たちは指摘してくれた。だとすれば、真弓への「不信感」に満ちた現在の浩一は、当然ながら高校時代の彼ではない。このことを美知子の立場から捉え返すならば、あの頃の浩一はいまはいない、つまり「死んでしまっ」ていると言えるだろう。

かくて、「死んでしまった」浩一に「会いたい」という美知子の想いは、『会いたい』という曲を媒介として、後に明かされる真弓の想い、

「私、あの曲を何度も何度も聞いてたのよ、ポストンで。あなたに会いたい、会いたいって思いながら」

ともシンクロしていく。のみならず、留守電に吹き込まれた『会いたい』をきっかけに自身の過去の恋に向き合っていく中で、不信感の欠片かけらもなく相手をまっすぐに見つめることの出来た高校時代の自分を、やがて浩一は取り戻していくことになる。それは、大学時代の恋への罪悪感が、

「私は、何度もあなたに会いたいと思ったわ。会いたい、会いたいって、日に何度も思ったこともある。でも、私とあなたのことは、この歌みたいにきれいなものじゃないもの」／「おれのこと恨んでるだろ？」／「別れたときはね。でも、今となっては、いい思い出」／「恭子は言った。／「幸せなのか、今？」／「ええ」／「そうか」

という恭子による赦しゆるを得るとともに、高校時代の恋によって受けた心の傷が癒されていく過程でもあった。だからこそ、「両方の気持ちがいっしょにしまま」離ればなれになった浩一と真弓は、彼を心配して突如帰国した彼女に、「おれは、きみに会いたいわって、ずっと思ってたんだ」と、浩一が素直に告げることのできたとき、「久しぶりにしつくりとしたくちづけ」を交わすことになる。

読解の作業をかなり駆け足で進めてしまったこと、またそれゆえに、授業が講義形式に流れてしまったことは確かに否めないが、はたして生徒たちは、どのように受けとめてくれたであろうか。

ここでは、生徒たちが授業後のあわただしい時間で書いてくれた《第三回授業改革フェス授業の鉄人・生徒アンケート》（愛知私教連作成）の第六項「授業を受けての感想」を掲出しておくことにする。【】を付したのは、後掲する教員用のアンケート用紙に書いて提出されたものである。

◎嘉規・I（高二） ちよつと変わった授業だったけど、こういう授業もたまにはいいなと思った。

◎剛臣・H（高二） 面白かった。わたしが思っていたのと異なることもあったが、納得できたのがよかった。（歌と沿って話が進んでいたことを知ったこと。九段落の最後に出てきた美知子が何だったのか。）

◎薫・S（高一） とてもわかりやすく熱意のこもった授業で、とても良かった。（内容の濃さと先生の弁論の上手さと企画の良さ、心の休息。十分な時間はなかった。）

◎香代・S（高二） 小説『会いたい』というもの自身、とてもよかった。また、先生の説明が分かりやすかった。

◎智江・M（高一） 順をおって主人公の気持ち、その他の人の気持ちが見かされていって、この小説の内容をよりよくわかることができた気がする。良かったです。

◎健太郎・S（高二） 面白かった。結局、「美知子がなぜ浩一ではなく、真弓の前に現れた？」（自分の見えない視点からの質問）の答えがききたい。（授業は考える上でのポイントを押さえてあるが、スピードが速く、波に乗りにくいから理解できなかった。）

◎誠・K（高一） 人の心には、自分が思っていないなくても、心の中の潜在意識の中にはしっかりとキズというものが残っていて、行動に現れるものだと思った。（人の気持ちのもちかた、失敗したあとの人の心、エゴイズム。）(2)

は、美知子が真弓という人物について、浩一をどう思っているのかを知りたかったから。／浩一と真弓がはなれたとき、たしかに浩一に喪失感があったと思う。そして、美知子を失った時はそれ以上に強烈な喪失感があったはずだが、恭子との間にはなかっただろうこと。

◎直路・K (高二) すごい。(この授業には骨はあるが肉はない。)

◎敬佳・F (高二) なかなかおもしろかった。どうせつまらんだろうと思っていたけど、なかなかためになった。(印象に残ったのは、全てにわたってつじつまがある事。)

◎真由美・I (高一) いろんな人に「会いたい」という気持ちがあるんだと思いました。(美知子は最後までなかったのか。)

◎宏美・N (高二) 時間がないのと、少しわからない所があったが、いい授業だった。

◎喬道・S (高一) この『会いたい』というのは、これで終わりなのか、まだつづくのか、それが知りたかった。時間があればよかった。もっとやってほしかった。この内容でこれだけのことがわかるとは、とても驚いた。

◎重夫・K (高一) 物語を読んで、主人公たちの立場になったり、考えを思ったりすることは好きだから、とつても楽しかった。途中までの物語みただけで次を読みたいと思えてよかった。

◎美樹・O (高一) もう一度ゆっくりとこの話を読んでみようと思った。一度目に読んだ感想と、内容を把握してからは、感じ方が、ずいぶん変わった。

◎和良・I (高二) とても面白かったです。もっと授業を聞いてみたいと思いました。

◎睦美・O (高一) 一番はじめの印象よりもどんどん違う考えが浮かんできて楽しかった。(印象に残ったのは、三つの恋がつながっていたところと意外な展開。)

◎絢香・I (高二) 先生の声はとてもききやすかった。人とつき合うっていうことは、いろいろ問題が生じるなど

つくづく感じた。【1. (2)よかったです。(4)とてもよい小説でした。なんかしんみりしました。(5)とてもいい雰囲気ですすんでました。(7)特になし。4. わざわざ京都から来てもらって、とてもありがたいと思いました。授業もとてもよかったです。】

◎三四郎・T (高一) とても分かりやすいと思う。またやってほしい。【1. (2)とても良かったと思う。(3)あまりできなかった気がする。(4)自分の心をひきだすようなやり方が良いと思う。(5)先生がかなりしゃべるものと思ってしまう(「時」関係)。2. 先生の進め方。4. とても良かったと思います。】

◎秀幸・S (高二) この授業を一時間で通すのは少しむずかしいだろう。みんなの意見をとりこむ点は大変良かった。

◎友宣・S (高一) 【1. (1)僕はとても好きな教材だった。(2)とても理解しやすい授業だった。(3)してよかった。3. まだ本の読みこみがたりないと思った。4. もっとたくさんこんな授業がうけたい。】

◎庸子・O (高二) こんな風に小説を登場人物一人一人の気持ちを考えて読んだことなかったから、すごく新鮮な感じだった。先生もはじめて会ったのにすごく自然に接してくれた。【1. (1)とても見やすくまとめた。(2)とてもわかりやすい授業だった。(3)参加してよかった。(4)時間がなくてあわただしい授業だったけど、最後までちゃんとした授業をしてくれてよかった。(5)初めて会ったのに、すごく自然に接してくれた。4. すごく丁寧に解説してくれてわかりやすかった。時間がないのが残念だった。】

◎隆志・A (高一) 面白かった。(「会いたい」の歌と授業の内容。)

◎訓大・T (高二) すばらしい授業だった。満足しました。(説明が詳細。この授業には形はあるが骨はない。)

◎友志郎・O (高二) 今まで受けたことのないような授業でおもしろかった。(どういう内容であるかという点は分かりやすいが、結末はあまり理解できなかった。)

◎希和・S (高二) 『会いたい』の歌詞と照らし合わせながら文章を理解することができて楽しかったです。

四

最後に、授業を参観してくれた教員諸氏の意見を、(一・二六授業の鉄人・参加教員アンケート) (愛知私教連作成) より転載しておきたい。このアンケートの項目は次のようになっている。

1. 次の視点で授業についてお書き下さい。
 - (1)教材、(2)評価、(3)参加、(4)感動、(5)関係 (生徒と教員の関係・生徒間の関係)、(6)触発、(7)生徒の要求
2. どのような観点で授業を見ましたか。
3. この授業で何か発見できましたか (自分の授業では気づかなかつたが、気づいたこと)。
4. 感想・コメント。

◎村田悟 2. 最近の感性的な文は読む気もせず、この機会に読んでみよう、そして、授業はどう展開するか思っています。4. なぜこういう題材を選択したのか? 大変ギモンである。どういう問題意識ででしょうか? 現実、社会と切れた教材を扱うこと自体に大変ギモンです。本当に内面を追求しているのだろうか? 「感性」を扱うにも、ある観点が必要ではないのか?

◎柳瀬真代 2. 生徒にうける最近のトレンディ小説をどう料理するか。4. トレンディ小説は私の苦手分野で、つい避けていましたが、この方法ならうまく行けそうです。一度やってみたいと思いました。

◎三井陽子 1. (1)生徒にとって、スツと入っていける教材だと思うが、深みがなく、自分自身は面白いと思えない教材。(3)短冊で一読後の感想を書かせ、授業に生かしていくところがいい。発表も多くよかった。(5)自分なりによく考えた答え(発言)が出されていたというのは、関係がよかったからだろう。2. 現代の生徒の心を動かす新しい教材の発掘、授業の方法。3. こういう教材でも、けっこう授業になるものだなあ。4. 生徒の「心を動かす」ものがあつたのかどうか、生徒の感想が知りたい。

◎水谷孝士 1. (1)現代の歌という点で身近。ミステリー小説は新鮮。(3)発言した生徒の名を黒板に。個々の意見の重視。(4)「死ぬ」の解釈に発見。(5)ノーマルな形ではあるが、意見の尊重(3と同じ)。(6)歌を流すことで、小説の世界との一体感が生じる。2. 歌という比較的入りやすい導入で、どこまで内容が深まるか。3. 読ませる間のBGMとして『会いたい』を流すのはいい。4. ホラー小説を丁寧に読むということが新鮮でよい。歌と小説との対比が丁寧。

◎水野逸俊 1. (1)歌物語の系譜で、現代的な「恋」をあつかっていて、いいものでした。2. 発問が優れていると思いました。

◎森多美子 4. 一時間で初対面の生徒と授業するのはやはり無理があると思いつつ。説明される言葉がムダがなくわかりやすかったと感じました。

◎鈴木誠 1. (1)おもしろい教材です。(2)浩一の不信感について、もっとつっこむべき。(5)八時間かけたとすればもっとよかつたろう。(6)時間がないためわからない。2. 歌の「会いたい」と小説の「会いたい」をどう結びつけるか、そのこと。4. よかった。

◎伊藤浩光／1. (1)はじめは何ということもない教材だと思ったが、非常に深く掘り下げて話をされたので、驚きました。(5)生徒がよく応えていたので感心した。(6)指導書に頼らずに真正面から教材に向かうことの大切さを再認識させて頂きました。(7)生徒の日常とは少し違うかも知れないが、馴染易い教材なので、「わかりません」という答えがなかったように思います。2. 教員の意図した答から大きくはずれた返答に対して、どう応えるかに着目していました。

◎林節子 1. (1)若い人の愛を考えるのにおもしろい教材だと思いましたが、一時間ではムリ。(2)教材を生かすきれなかった点と、教師主導になった点で、残念。(3)できればポイントをしばって班討議などさせるとよかった。生徒の受けこたえはよかった。(4)急いでしまっってはちよつとムリ。2. 生徒が主体的にとりくめるか？ 感動や発見があるか？ 4. 教材が消化しきれない点が残念でしたが、教材そのものは大変おもしろく、参考になりました。

残念だったのは、授業後に予定されていた合評会が流れてしまったことだ。今回は所謂「実践報告」ではなく「公開授業」という形態であったから、教員諸氏に向けて語りえなかったことはあまりに多い。私としては、諸氏の批判に應える用意はあるし、いろいろと語り合いたい事柄もあったのだが、いまは、そうした機会のいつか訪れるであろうことを期したいと思う。本稿は、その日のための、一つの「たたき台」となることを企図するものでもある。

※ アンケートは、私の受け取った全員のものを取捨選択することなしに掲載した。教員アンケートで項目が飛んでいるものは未記入箇所、書かれていた内容は全て転載してある。生徒名は苗字をイニシャルに改めたが、教員名はそのままとした。こちらは授業勝負に出かけたのであり、そのつもりで教員としての責任をもって応えてくれたものと思うからである。

注

- ① 鎌田敏夫「会いたい」の初出誌は、『野性時代』（角川書店）一九九四年二月号。後に角川ホラー文庫『見知らぬ私』（一九九四年七月）に収載されている。ここでは、文庫収載本文を用いた。
- ② この授業の詳細（教材選定の基準、年間授業計画の中での位置づけ、授業展開、生徒たちの感想、等々）については、拙稿「鎌田敏夫『会いたい』の授業」（『同志社国文学』第43号、一九九六年一月）にまとめている。
- ③ この授業の展開や、生徒たちの手になった歌物語については、拙稿「現代の歌物語を書く——鎌田敏夫『会いたい』の授業」（『研究紀要』第32号、一九九五年十二月）にまとめている。

付記（読者のみなさんへ）

このたびは、私の授業実践をダウンロードしてお読みいただき、ありがとうございます。

私のホームページ《たまぶりぶり通信》では、「授業実践記録」(<http://www.nextftp.com/tmbb/lessons/>)に次のような授業実践を公開しています。WEB版の閲覧とPDF版のダウンロード、いずれの形でもお読みいただけるようになっていきますので、是非、ご利用ください。今後も少しずつ追加していく予定です。

《たまぶりぶり通信》WEB版・PDF版

- 山田詠美『蟬』の授業
- 現代の歌物語を書く
- 鎌田敏夫『会いたい』を読む
- 清水義範『トンネル』の授業
- 鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業

また、「生徒たちの《現実》と切り結ぶために」と題した全六篇のシリーズを《でじたる書房》にて販売しています。この一連の論考は、高校生たちの現実感覚や体験と響き合うような現代作家の作品（五篇）を自主教材として取り上げた授業実践あるいは授業指針について述べたものです。タイトルと扱った作品は次の通り。あわせてお読みいただければ幸いです。

《でじたる書房》PDF版

- 心の《皮むき》のために——山田詠美『賢者の皮むき』の授業——
- 恋人という名の他者——岩川隆『有楽町心中』の授業——
- 選択肢としての《生》——重松清『舞姫通信』の授業——
- 《希望》の在処——村上龍『希望の国のエクソダス』の授業——
- 新たな《現実》に向かって——鷺沢萌『卒業』の授業——